

想いを形に

——対人支援の現場で見たこと——

小坂 興道

ご紹介に預かりました臨済宗妙心寺派長慶院で住職をしています小坂興道です。みなさん、こんにちは。(こんにちは) 臨済宗は禅宗の一派になりますけれども、普段は剃髪ていはつと言って頭を剃っています。今日はちよつと来る前に時間が取れなかったので、今、これは業界的にはロン毛の方です。ま、髪の毛があってもなくてもやることはあまり変わりませんので。

紹介等はお渡しした資料に書いてありますので見ていただいたかもしれません、私の主な活動として、一つは東日本大震災の被災地支援です。「わらべ地蔵を被災地へ」というプロジェクト名でやっているもので、代表を務めています。もう一つは「京都自死・自殺相談センター」、愛称は「sotto (ソット)」というんですけれども、そちらで居場所づく

り委員長をしております。最初の「わらべ地蔵を被災地へ」プロジェクトは、毎日新聞の記事で紹介してもらっています。実物はこんな感じですよ。手のひら大のお地蔵さんですよ。木彫りで、これを仏師ぶつしと言って仏像を彫刻する方の指導を受けながら、僧侶と一般の方と一緒に彫っています。底面にはメッセージが書いてありまして、「京都 笑顔で大切に！ 元気が1番！」これは大学生くらいの女の子が彫ってくれたものですが、これを我々が被災地に行った時に渡してくるんです。そして「全国でみなさんのことを気にかけている人がこんなにいますよ」「たくさんの方がいるんですよ」ということを伝える、そういう活動を軸にやってきました。現在は、いくつも彫ったところで需要はだんだん下がっていきますので、また違う活動に移ってきていますが、これが根本の活動でした。

この写真は、さら地とか枠組みはまだ残っていますけれども、津波に攫われてモノがなくなつた所です。場所ははっきり覚えていません。私が実際に被災地に入ったのは二〇一一年一〇月ぐらいで、震災から半年ぐらい経つてからでした。この写真の右の方に黒い山みたいなのがありますが、これが瓦礫（がれき）と言われるものです。だいぶ少なくなっているんですけども、前に行った時は道路の部分だけが避けられていて、道路以外の所に瓦礫がうずたかく積んであるという状況でした。建物の二階ぐらいの高さまで積

み上がったものがずっと壁のようになっていました。仙台から海の方へ向かった荒浜の辺りだったと思います。案内に同じ妙心寺派の和尚が車を出してくれたので、一緒に乗せていってもらって、「ここが、あんななってる」「こんななってる」と見せてもらったんです。半年そこらの時点では瓦礫の山がまだたくさんありました。道も所々陥没してたり、崩れたりしてましたので、結構な所で通行止めになっていましたね、迂回しながら見て回った記憶があります。その時、最初に「すごく風が冷たいな」と思ったんです。東北の一月ですから、ある程度肌寒い感じはあるのかもしれませんが、「普段からこんなですか」って聞いたたら、やっぱりそうじゃなかったです。瓦礫の山はあるんですけど、建物がなくて風の通りが良くなっちゃって、特に海っぺりに近い方ですから、海風がスーッと入ってくるわけです。まだ雪も降らないのに寒いなあという思いをしました。

ここの家は、きれいにと言ったら変ですが、土台の枠組みだけが残っていました。門扉の両壁が残っていて、その柱の上に、仮に山田さんならその標札が残っている。それを見た時に、「ああ、こういうことなんだな」って。我々のように外から来た者は、簡単に「あ、これ瓦礫ですね。すごい量ですね」って話をするけれども、瓦礫の山は瓦礫じゃなかったんですよ。誰かにとって大事な生活やったんですよ。住んでた家であつたり、大

事にしたものであったり。例えるならば、今、みなさんが足下に置いてある荷物も全部ひっくり返して流されて、それを片寄せて山にした時に、瓦礫の山と言われるようになってしまったようなものです。でも、本当はそうじゃなくて、一つ一つがみんなの生活の一部で大事なものだっただって思った時に、すごく何とというか、切ないというか、言葉にできない思いにとらわれました。その風景が今でも強く頭に残っています。

これはまた別の所です。南三陸から女川に向かう辺りかな？　ここが鉄道が走ってる所ですが、途中から流されてなくなっています。ここにもやっぱり瓦礫の山があつて、作業車がたくさんありました。この辺はこういう作業車ばかりでした。これも同じような所で、瓦礫の山です。人の背丈より低いものはなかったですね。こういうのが震災後、二、三年はあたりまえのようにありました。宮城県の中でも仙台とか都市部は片づきが早くて、道路が直されて、付け替えられて行きました。

私は昨日、この画像の整理をしていたんですけども、思い出して感情を揺さぶれるので、話をパツパと進められなくて申し訳ないです。こういうものがあります中で、わらべ地蔵の活動の原点になった……これは分かりますでしょうか、石巻にある大川小学校です。ここでは子どもが七四人亡くなりました。すぐに避難せずに、ここで「送迎が来るの

を待ちましよう」ってやってる間に津波が来てしまっって、たくさんの方が亡くなられました。その後、石巻市を相手取って訴訟になった所でもあります。

「わらべ地蔵を被災地へ」という活動は、京都の妙心寺派の若手の和尚の集まりと、山梨県にある若手の和尚の集まりの二つが中心になって動いていたんですが、そこに「こういうことをやりたい」というアイデアを持ち込んできたのが、さっき言った仏師の富田くんです。彼はこの頃に最初の子が生まれてるんですね。あまり個人のことなので言うのもあれやけど、結婚したけどなかなか子どもに恵まれなくて、何年か経ってたのかな。出来るもんかな、出来ないもんかな、って心配してたところによく生まれて、すごく喜んでたところに震災が起きたんです。そして子どもたちがたくさん亡くなったというのを聞いて、これは他人事じゃない、居ても立ってもいられない。何かしたい。何か出来ることないかって思った。彼は花園大学（妙心寺派）でして、そこに何人が友だちがおるもんやから、「みんなで何かやれへんかな」っていう話になったんです。

実は若手和尚の方でも一つジレンマを感じたことがあったんです。山梨の方の若手和尚は地理的に近いこともあって、東北に親戚がいるという人もいたので、震災後、四、五日ぐらいの早い段階で現地に乗って入っています。道を通れるようにせないかんといいこと

で、瓦礫を横に除けたりとか、いろんなことの手伝いをしに行っていたんですが、一日の作業が終わって「さあ、帰るぞ」という時に、格好は作業着で行ってますけれども、我々はやっぱり僧侶ですから、我々でしかできないこともあるやろうと、お経をあげようとしたらしいんですね。どこに向かつてということもないけど、やっぱり海に向かつてお経をあげようとしたらしい。そうすると、そこには、外からのボランティアばかりじゃなくて、大事なものが残ってないかとか、あるいは自分の家族がそこにいるんじゃないかとか、捜しにこられてる現地の人もたくさんいたんです。その方々から、「お経をあげるのはやめてくれ」って言われた。まあ、いろいろ引つかかることはあるかなって思って「ごめんなさい、どうしてですか」って聞いたそうです。震災から三日過ぎると生存の可能性はほとんどないと言われるので、現実的にはみなさん、自分の御身内はダメだろうと思ってる。頭ではわかってるんだけど、そこでお経をあげられてしまったら、あなたのお父ちゃんはお母ちゃんは、息子は、娘は、死んだんやでってハッキリ言われてしまったような気持ちになる。だから、まだ待って。嫌なことをされてると思ってるんですけど、今それをされるのは辛い。まだ信じてる。まだ、どこかから見つかるんじゃないかと思ってるから、お経をあげるのは待ってってくれって言われたそうです。そういうことを経験していた連

中は、暇を見つけて手伝いには行くんですけど、それ以来お経をあげることはできなくなつてしまつたんですね。でも、私たちは人の心に触れる立場なんだから、何か作業以外で必要なことがあるんじゃないかと考えていた中で、たまたま富田くんの話があつたんです。「僕も何かやりたいと思つていました」「俺たちも何かやりたいと思うんですけど、良い形が見つからんのやわ」つてなつた時に、じゃあ、今すぐ何か問題を片付けるということじゃなくて、今、しんどい思いを預けておけるような存在が作れたらいいんじゃないか。そこで、わらべ地藏です。正式な仏像じゃない、みんなが思いを込めて彫つて、そこにメッセージを付けることで、ひよつとしたら何かの慰めになるかもしれない。しんどい、苦しい、辛い、そんな思いを、一時でもお地藏さんが背負ってくれるかもしれない。そうした活動の原点になつたのが大川小学校でした。今は残つていませんけれども、これは三年目くらいに撮つてるのかな、一周忌にお供えたものがまだ残つてたんです。分かりにくいですけど、日に焼けて薄黒くなつています。慰霊碑もたくさんできまして、ここでもお参りしました。大川小学校は鉄筋の建物なんですけど、見るも無惨にバリバリと割れていきます。これは講堂と校舎を繋ぐ渡り廊下で、完全に落ちてしまつています。もちろん立入禁止になっています。破壊力がすごかつたことを示していますよね。

わらべ地藏を届ける活動を東北のお坊さんたちの協力を得ながらやっていく中で、中核になったのは松島の瑞巖寺です。「松島や ああ松島や 松島や」で有名な日本三景の地で、そこにある妙心寺派の道場を中心に活動を続けていきました。

手短に、どんなところがあつたか見てもらおうと思います。これは、岩手県の北の方にある観光ホテルです。結構テレビなんかにも出てくるのでご存知かもしれません。二階部分までがもろに抜けてしまつてね、三階から上もかなりひどいんです。ここは震災の遺構として残すことになりました。メインの活動は瑞巖寺とその付近で、活動が終わるとみんな三々五々、帰るんですけど、私は割としつこい性格なもので、もうちょっと残っていたいなど思つて、よく一人で宮城の南部から北に上がつていっていました。これはさっきの観光ホテルです。雪が降つた年もありました。

そして、これが陸前高田です。松原は元々、防風林と言つて海風を緩衝するためのもので、潮が上がる時でもある程度食い止める役割をするんですけど、今回の津波では一本しか残りませんでした。「奇跡の一本松」です。実際には枯れてしまつたんですけど、樹脂やらで固めて立て直しています。生物としては死んでいるんですけど、象徴ということが残されています。これをするのに一億なんぼかかつたとか言つたかな。

これはベルトコンベアーで、街の中を縦横無尽に走っています。高台の山から土を切り出して海辺の松原の辺りにどんどん運んでいく。土地を埋め立てて嵩上げするという作業をやっていたところですよ。このベルトコンベアーを作るのにも何億とかがかかっています。でも、そのお陰で復興作業がものすごく早かったということです。

何でこういう話をするかと言うと、震災後だいたい三年目くらいから、みんなの意見が分かれだしたんです。震災後すぐは、体育館とかで肩を寄せ合って、食べ物を手に分けようとか、毛布を子どもに優先的に渡してやりとか、いろんなことを融通しあってやってきたものが、避難所から仮設住宅に移り、ちゃんと住める街をつくらうと本当に意味での復興に取り掛かった時に、その復興の仕方で見解が割れだしたんです。奇跡の一本松も、「ああいう象徴があると、そこを目にかけて人が来てくれるし、お金も落ちるし、いいじゃないか」という考え方もあれば、「あんなものに一億かけるならさっさと配ってよ、今困ってる人がいるじゃない」という意見があったり。さっきの観光ホテルは民間の所有物ですけれども、震災の遺構・モニュメントとして残していくのか、壊して無くしてしまうのか、意見が割れました。この頃から現地の悩みが複雑になっていったと感じました。

仮設住宅が出来た時は不満も多かったんですよ。東北は一軒家に住んでいる方が多く

て、隣り同士でも離れてたりするので、隣のお茶碗の音が気になるような所には住んでなかつたのが、壁が薄くて何しても隣りに気を遣う生活になつた。体育館での仕切り生活のことを思つたら良くなつたけど、仮設住宅にみんなが落ち着いてくると、また違う悩みが出てくるんです。ただ、一様に皆さん二言目には「でも、ぜいたくなんだよね」って言われるんですよ。支援物資のミスマッチもありました。「これが欲しい」つて要望したものがようやく届いた頃にはもう事足りてて、同じものがドカドカと来て困つたなあと。いらんところばかりに回つて必要なところに行つてない。でも、「あつちが欲しい」「こっちが欲しい」つて言いづらい。あれだけモノがなかつたことを思つたら、あり余るぐらい来て、無くて「無い」と言えばやってくるのがわかつて、それだけでどれだけ安心して生活ができるか。でも実は、隣近所の音が気になつたり、思つた時にモノが買えなかつたり、というストレスは大きいんです。みなさんも、急にそういう生活を強いられたら、やっぱり嫌でしょう。「今から擬似的にああいう生活をしてみましょうか」「何も買いにいっちゃいけません」つて。鼻紙一つ、次に支給されるまで待たなくちゃいけない生活ですかね。そういうことを現地の人は思うけど言えない。そういう生活を強いられていました。

ここは南三陸の防災庁舎です。南三陸町に防災センターがありまして、その建物です。大方上までなくなっていますね。ここが何で有名になったかというところ、最後まで残った女の子がいるんです。勤めている職員で、街の人に最後まで「避難をしてください」と言い続けて、自分が逃げる頃には間に合わなかったんです。前に祭壇があって、行ったのは震災後一、二年後で、その頃まではお参りしやすかったですけど、今は、建物の二倍から三倍ぐらいに土で嵩ましてあって、すぐには行けなくなっていました。また落ち着いたら行けるように道は付くだろうと思うんですけど、今は谷底にあるような状況になっています。そして、ここで私は宗教者としての一つの思いを経験することになりました。震災一、二年後ぐらいの三月一日に宮城での行事を終えて、また一人でぷらぷらといろんな所を巡っていた時に立ち寄ったんです。一日過ぎて二日とかでしたけど、たくさんの方がお参りに見えていました。みなさん、お線香をあげて、お花をお供えして帰っていかれるので、私も交じって、お線香をあげて、お経をあげて帰ろうとした時でした。私よりちょっと前にマイクロバスで来ていた団体さんがいて、その中から、おじいさんとかおばあさんが、ガラス越しに、一生懸命こんな（手を合わせて）してはるんです。声は聞こえませんが「ありがとう、ありがとう。よう来てくれた」という感じなんですよ。

こんなこと今までなかったんです。私はお寺に生まれて育つてますので、出家して手伝いをするようになってから、お経をあげに檀家さんのところに行けば、「お経上手くなってきたな」「お父ちゃんに似てきたな」「今日は立派にあげてくれてよかったわ」って褒めてもらえる嬉しいものがありますが、それはそれとして、実際にお経をあげるのは、私にとっては当たり前すぎて、そんな特別なことじゃないんです。手を抜いてあげようとか、いい加減にあげようと思ったことはないですけど、そこまで一生懸命やったからといって、何かが変わるかと言ったら特にそんな力はありません。ところが、この体験をした時に、「こんなにも通じるものなのか」と改めてこちらが教えられたような気がしました。思い返すと、現地に行つて「お経をやめてくれ」と言われた時とは全然違うわけです。時が経つて、その間にいろんなことがあつて、受けとめる側の気持ちが変わつたのが一番大きいんだと思いますけれども。みなさんも、おじいちゃん、おばあちゃんの家に行つたりして、お経をあげてもらふことがあるかもしれません。でも、その時はどうとも思いませんわね。小一時間そこら、前で、ふにゃふにゃふにゃ……つてお経をあげてるのを「ようわからんな」つて思つて後ろで聞いているだけなのが本当のところ、そんなに気持ちが悪くこともないと思うんです。でも、この時は、お経をあげる、私にとって何でもないこと

が、こんなにも人の気持ちを動かす、すごいことだなと思ったんですね。「お経の宗派なんて何でもええねん。誰とは知らんけど、お参りに来てくれる人がいる、それだけで気持ちが救われた」こんなにも大きいことがあるんだということを感じた場所です。今、他の慰霊碑がある所はすつと行けるんですけど、ここだけが周りを工事してまして、毎年、なかなか行けないので心残りです。

今は、仮設住宅もなくなって復興住宅へ移っていますので、さっき言ったわらべ地藏をたくさん彫ったところで、受け取ってくれる人を、どこに追っかけていったらいいのやら？ということになっています。ですので、今は、残り少ない仮設の住宅のために茶話会のようなことをしたりしています。今年の三月一日に近くのショッピングセンターで慰霊祭があったんですけど、この方達は行けなかったんですよ。「どこそまで出てくればバスを出しますからお参りに来て下さい」ということだったんですけど、その「どこそこまで」に出ていけないとか、あるいはお参りに行きたいけど、人が多いところに出ていく気持ちになれないっていう方がいらっしゃったんです。「みなさん、もう昨日でお参り終わってると思いますが、せっかく来たんでお参りしましょうか」って始めたら「いや、実は昨日行ってないのよ」「宗派はわからないけど、一緒にお経をあげられて良かったわ」

って、そういうことがありました。蕎麦打ちの方も来てたので、蕎麦を食べたり、お菓子を食べたりしながら、時間を過ごしました。今は、そんな動きになって来つつあります。これが被災地支援のお話です。

もう一つ私がやっている、自死・自殺の取り組みです。これは一つ、きっかけがあるにはあったんですね。私自身は被災地に一〇月に初めて入っています。それまで何してたの？ 京都の人間も山梨の人間もとっくに入っていました。私はずっと京都にいたんですが、その間何をしてたかというと、本当にこれはたまたまなんですけど、同じ三月一日の深夜二時頃、前の日の一〇日の昼に会っていた友人が首を吊って死んでしまったんですね。その人の婚約者にあたる人に一時半ぐらいに知らせを受けて、「それで、どないしたんや」って言ったたら、まだ何にもしてないって言うから、「とにかく救急と警察を呼びなさい。私は今からそこに行くから、その場にいられんかったら近くのコンビニなりにおりなさい」って言ったんです。彼にはその日の昼に相談を聞いてはいたんですけど、死にたいというような話じゃなかったんです。商売をやっている「資金繰りが上手いこといかなので何とかならんかなあ」とか、私にも「いくらか融通してくれんやろか」という話や

ったんですけど、私もあまりため込まない方なんでね、「いくらかは出せるけど元が何とかならんことには焼け石に水やで」「後のやり方をまた考えようや」とっていう話をしていて。その日の晩みたいな感覚です。亡くなってたんです。何人か別の友だちと飲んでたらしいので、勢いなものかもしれないし、思い極めて（自殺を）やったらうと思っただんかは未だにわからないところがあるんですけど、そういうことがあって、その日の二時から、その婚約者に付き添いながら、警察で一二時間ぐらいかな？ 次の日の昼まで事情聴取を受けてました。自営業で婚約者も一緒に仕事をしたので、その後の店の始末とか、やっていくにしろ、やっていかないにしろ、また、仕事場と住まいが一緒だったので、隣近所の付き合いも仕事の間だけというわけにはいかないので、その辺のこともいろいろやりとりしないといけない。それでちょっと町内と揉めたり、最終、弁護士を入れたり、いろんなことをしまして、次の生活の目途がつくまでそっちにかかりきりになっていたら半年ぐらい経ってました。半年ぐらい経って何とか生活していけそうやということになって、「じゃあ、また何かあったら言い」とって、そういうことがあったんですね。

そして被災地に行つて、さっき言った瓦礫の山を見たり、いろんな所でお話を聞いたりする中で、「死にたいぐらいの思い」を被災地の方がたくさん持っているということに気

付いたんです。さつき言いましたように、話したいことが話せない。そういうことはたくさんあった。これは時期によっていろいろあるんですけど、ある仮設住宅の集会所で、おばちゃん二人と私の三人、地元の人を入れて四人かな？で話をした時です。一人のおばちゃんが、家にあった火鉢が盗まれたという話をしたんです。「合間合間に家に戻って整理したりしてたんやけど、前までどんとあって重宝してた火鉢がなくなってたのよ」「それがまた別の場所で見つかったのよ」あの辺のことなので、モノを強奪するとか乱暴なこととは少なかったんですけど、「え？」って思うような話はチラホラあったそうです。そんな話をされていたら、しばらくして、もう片一方のおばちゃんが「あんたんとこ、そうやったのね。うちはあの時はね、○○してね、○○してね……」って話し出さはった。そうしたらもう片一方のおばちゃんが、「はあ、あんたんとこはそうだったの」って感じで聞かれるわけです。今、みなさんは「それが何？」という感じで聞かれていると思いますし、私も最初そうだったんですけど、「あれ？」って思ってたんです。仮設住宅に移ってからだから、震災後一年半とか二年経ってるんです。同じ集落の方が移って来られてるんですよ、てんでバラバラ、知らない者同士ということじゃない。「すみませんけど、あなたたちは今まで一緒にいらっしやって、ようやく知ってる中で、今までそういう話って出な

かったんですか」って素朴な質問をしたら、「いやあ、話せんよ」と。お互いの傷に触り合うところもあるし、自分がしんどいわ、辛いわって思ってたても、自分のところは家が流されただけで人は助かったねとか、うちは流されたけど一人で済んだねとか。私からしたら、どっちだって大層なことですけど、そんなにしんどい思いをしている人たちの中で、ランク付けじゃないんですけど、ちょっとした違いが大きな違いになって迂闊に言えない。そんなこと言ったら誰かから、あんたんとこはいいじゃないって思われるかもしれない。あるいは本当に私が一番ひどいんじゃないかという話をしたらしたで、みんなに気を遣われるんじゃないだろうかとか。「そんなことを考えたらお互い話せませんでした」。たまたま私みたいな第三者が来たから話しができた。旅の恥はかきすてという言葉がありますわね。出た先なら多少しくじっても何しても笑い話で、ここに住むわけじゃない。次から次へ行ってしまうんやから良からうという感覚ですけど、その逆みたいなものです。私みたいな第三者は、よう来たって年に一ぺんしか来ない。二度と来へんかもしれないから何しゃべってもいいわみたいな。そういうことがあって初めて話げできた。そういう方がいらっしやいました。良い話も、悪い話もできないんだそうです。自宅の再建が決まったって、「良かったね」ってみんなに喜んでもらいたいし、自分も「良かった」って言いたい

けども、隣り近所にはまだその目途がつかない人がいる。「はあ、よかった。お陰さんでね、うちは家が建つことが決まりましたね」そんな話とてもできない。

時が経つといろんな問題が出てきます。みなさん夫婦げんかが悩みの種やと言われてました。避難所から仮設に入ったすぐぐらいの時は手一杯で、子どもがいるところは、生活どうする、学校どうする、目の前のことだけであれこれ考える余裕がなかった。ところが、時が経って考えることができるようになってくると次のステップに進むわけですよね。仮設のままではいけない。じゃあ家を買う？ 前の家のローンまだ残ってるのよ。新しい家を買ったら二重ローンになる。返せるあてあるの？ 商売をしてはるところなんてもっと大変です。住まいとは別に、仕事の間を借りようか、買おうか、二重ローンにプラス三重ローンみたいな生活です。商売、頑張つて言うけど、それで間に合うの？。そして、だいたい旦那さんはこういう時、慎重になるんです。新しく家を建てる時には津波の心配をせんでいいように高台を買ったりするんですけど、ああいう場所は例外と平地が少ないわけですよ。そうすると平たい所を嵩上げてそこに家を建てる。これ、土を盛るので盛土（もりど）って言うんですけど、盛土の上に建てた家を大工さんはまず買わないって言います。なぜかという土地盤沈下するからです。山の斜面に新規住宅地を造りますっ

て言った時も、切土（きりど）と盛土と言って、斜面の片一方を切って、その切った部分を盛土にすると平らな部分が広くなりますよね。切土にしたところは元々あった地面の上だからしつかりしてる。でも盛土の方は土を盛ってるだけやから、ガンガン固めてるようですけど弱いんだそうで、一〇年、二〇年で沈むんだそうです。ハウスメーカーは盛土にした所から先に売って後で切土の方を売る。別段悪いことではなくてそれが普通だそうです。で、家を建てる大工さんのような人は、後で資産もぐつと下がるし「そんな家買うもんじゃない」と。でも、そんな条件の良いところなんてないわけです。「条件の良いところが出るまで待つてようぜ」っていうのが旦那さんです。ローンを組んで働いて返すという気持ちは旦那さんの方に強いもんですから簡単には買えない。でも、奥さんしたら、早く、子どもをきちんと家から通わせられるような、買い物や普段の生活のできる安定した環境がほしい。「早く家を建てようよ」「早く家を買おうよ」となる。そこで意見が分かれてケンカになる。この話をしてくれたのは現地の語り部ガイドをやってくれている方で、本当にこのケンカだけは嫌ですとおっしゃってました。飯がまずいとか、稼ぎが少ないとか、ありそうなことで夫婦げんかになるんなら仕方ないけど、こと震災に関して生まれた悩みが原因でけんかする、こんな馬鹿げたことないわ、みたいなね。ただ、そうい

う思いは余所じゃ言えないんですよ。それを言ったら、「お互いあるよね」で終わっちゃうので、やっぱりフタをするんです。「そんなこと言うたってみんなそうやないか」それまでなんです。だから本当のことが言えなくなってくる。

ある時、これはおばあちゃんでしたけど、孫娘が亡くなったんです。時々ある話だと思いますけど、「津波が来るぞー」ってみんなで一斉に逃げたところで、高校生ぐらいかな？ 君らとそう変わらない年の子です。「おばあちゃん、いないわ」って気付いて、「私が一番足が速いから行ってくる」って言って、探しに行行って戻らなかったんです。おばあちゃんは別な場所にもう避難していて、「古い先短い私が死んでいれば良かったのに」って。あの辺は「津波でんでんこ」っていう言い方をするらしいですけど、てんでバラバラに逃げる。誰彼かまわず逃げる。それがみんなが助かる確率が一番高くなるらしいです。誰かを構いに行ったり、「荷物これだけ持って出な」とかやりだすと間に合わない。運命を分けてしまうということで、とにかく逃げろって言われてるんですけど、若い子だから、昔の伝承は知らなかったのか、それで亡くなってしまったんです。本当はその気持ちと言いたかったけど言えなかった。そら、言えばね、「あなたね、お孫さんが助けてくれた命やと思いなさいよ」と。お孫さんの分まで長生きしなさいよじゃないですけど、その

分大事に生きてあげなさいよって言われる。それは最もなんですけど、今辛い気持ちでいる人には残酷なんですよ。「辛い」と言ってる時に「辛いと言いな」「しんどい」と言ってる時に「しんどいと言いな」そういう感覚ですかね。

みなさん、想像してみてください。中学生か高校生の頃にね、例えば学校の部活で友だち関係で何かがあったと。「嫌だな」と胸の中にモヤモヤが滞ってる。家に帰ってつい「はあー」と溜息が出てしまう。お父さんやお母さんが「何や、どうかしたんか？」って聞くけれども、言うてもあれやし、言われへんしなあと思いつながらおる。そういう時ってしんどくないですか。そして、あんまり溜息つくと「お前、訳を言いもせんに溜息ばかりつくな」って言われたらどうですか。もっとしんどいですよね。被災地では、そういう状況をみなさんは自分たちで作りに出したり、何も言わなくても無言の圧力を感じながら生活をされていたところがあるんです。物資が届く、届かへんという話しても、文句言えない。「本当は、こっちじゃなくてこっちがいいんだけどな」って言えない。そういう小さなことを、たくさん、たくさん、積み重ねていくと本当に死にたい気持ちになってくるんです。

今、相談センターで大事にしている姿勢ですけれども、死にたい気持ちを死にたい気持ち

ちのまま受けとめる。「いや、そんなこと言うもんじゃないよ」「仏様、神様のご加護だつてあるんだから」って我々の立場なら言いそうですけど、そういう「命は大切にすべきですよ」っていうメッセージ自体が苦痛に感じられてしまうタイミングってあるんです。それが難しいと思います。「私の気持はどこにも出しようがない」「誰にもわかつてもらえない」苦しさ、辛さは、孤独と相俟ってより一層大きなものになってしまふ。自死・自殺で亡くなる方の、全部とは言いませんけど、経済的にしんどいとか、病気で苦しいとか、人間関係で悩んでいる、いろんな理由がありますけど、最終的に背中を押すのは孤独感が深まつてる時かなと、私自身、相談センターの活動を通じて感じることです。孤独でないと思える所、こんなにしんどいし、苦しいけど、たまには話せる人がいるし、愚痴がこぼせるし、しんどいならしんどい、死にたいなら死にたい、って言ってもいい場所があると思える時、「はあ」と溜息をつけてそれだけで済む瞬間がある。そんな場所を作れるように、我々は考えています。

今日の講座タイトルを「想いを形に」にしたのは、私がいろんな活動で見聞きしてきた中で、一つの形を取ることが非常に意味のあることだと実感したからです。お経をあげる

という一つの形が、あんなにも両極端の意味を持った。これは、お地藏さんを彫った支援する側の人ですけど、「今まで、コンビニでもどこでも、目に付くたびに募金をしてきた。機会があるたびに、ちよつとでも思ってお金を出してきた。でも、自分はそこそこの年やし現地で何ができるわけでもない。それを思うと、やっぱり私は何もできてない。お金出すだけで終わらせてるといふ、実は苦しい思いがありました」とおっしゃった。こちらでは阪神淡路の震災がありましたから、中にはその時に助けてもらったという思いの方がいらつしゃったかもしれません。直接被害がなかったとしても、あの当時、たくさんの人が来てやつてくれたという記憶はあるもんですから、今度はぜひ自分が行くぞ、となった。でも、そうなった時に、一番難しいのがタイミングなんです。阪神大震災の時、私は一九歳で、大学受験で浪人中でした。間が悪く、その頃に親父が亡くなって、お寺のこともせんならん、修行道場に先に行かなならんわつてなつて、震災が近くで起きたのわかつて、今と違つて体力も時間もあるんやけど、何も携われないまま終つた。そういう思いもありました。その時、一番動ける。体力、気力、経済的、時間……こういう条件が揃つた人でないとなかなかできない。本当は何かしたいのに出来ない人が、わらべ地藏という一つの形に出会つたんです。私は一番慣れてる時で彫るのに二時間かかりました。ある程

度形が出来ているところを彫るんですけれども、慣れてない一般の方は、説明を受けながら、だいたい四、五時間かかります。結構な労力です。そうすると、これを彫って、メッセージを書いて渡したものが、どれだけ伝わるかわからないけれども、少なくとも今、自分の時間を割いて、労力を使って、支援に繋がることができた。良かったです。と言った方がいらつしやいました。一つの形を取るといのはすごく大きい意味があるんです。言葉ですね。死にたい時に「死にたい」と言える。辛い、苦しい、憎い、腹が立つ……、ネガティブな感情が出せない、それを言葉という一つの形に出せた時、ふっと気持ちが軽くなるんです。これが、私が数年、被災地の支援と自殺の取り組みをやってきた中で強く感じたことです。

みなさんは、それぞれの生活の中で出来る形があります。そういうことに気づいて欲しいと思います。一番元手がいらなくて出来ること、仏教では昔から言う言葉があります。布施をするんです。布施というのは金封に入ってるお金のことはありません。布施という行為の中には、和顔愛語わげんあいごと言って、柔和な顔、優しい顔、愛のある優しい言葉、それだけで人の気持ちを救える部分があると言うわけです。だから、みなさんも、自分自身が苦しい時もやけど、隣り近所でそういう言葉をかけあえる、そういう付き合いができる仲間

をつくっていただけるといいなと私個人は思っています。

みなさんが入ったのは宗門が後ろについている学校です。宗教の何が一般の仕事と違うのかというと、これはね、仕事じゃないからかな？ 私はクレジットカードとか作る時の職業欄が非常に困るんです。寺院住職って書き方があるって気づいてからは楽になったんですけど、今のありようが仕事かと言われたら……、確かに給料をもらってご飯を食べてるけど、これで商売して、サービスして、その対価をもらって生きてます、という感覚じゃないんですね。仕事というより生き方かなと思ってるんです。僧侶としての生き方というのかな。仏教でもキリスト教でも一緒だと思いますけど、我々の生き方は、人のために時間を割くことが、ある程度前提になってる、そこですかね。一般の方は、ある意味、自分のために生きていいんですよ。自分と、自分の家族とかね、近い人のために生きるというのはいいことです。その先に人の役に立つ仕事が出来たら尚いいなっていうくらいのことかなと思うんですけど、我々の場合、人のために時間を割くということが前提として織り込まれてないといけないんじゃないかなと思っっています。これは宗教者の一致した見解ではなく、私自身の勝手な見解なんですけども。なので、今は非常に自由が利いていいですよ。金銭的にも、時間的にも。京都での仕事もやるにはやるんです

けどね、いろんなところに行つて、いろんな人と交われる。こんないい生き方ないわと思つてやっています。それは私の問題ですが、みなさんにとって宗教者がどんな時に一番役に立つかつていうと、どうにもならなくなった時です。どうにかなる問題は、必ずどうかしてくる人がいます。例えば、法律のことだったら弁護士とか、犯罪とかなら警察とか、すぐカタが付くか、上手にカタが付くかは別にして、力になってくれる人たちがいます。お金を出さないといけないかもしれないけど、健康問題ならお医者さんがいますよね。あるいは生活に困つてどうのこうのなら、行政で生活保護やら福祉やら、やつてくれる人たちがいます。ただ、行政の手によつて最低限の生活を保障されたり、病院で鬱病の治療を受けてたりするけど、死にたい気持ちを抱えている人の多くは、なおかつ、その思いが消えないんです。さあ、どうしたらいいの？つてなつた時、一番最後まで付き合えるのが宗教者かなと思っています。もちろん、宗教者じゃなければ関われないということはないですし、Sottoにおいても宗教者が優れていて一般スタッフが劣つているということではありません。きちんとして訓練を受けたら同じだけのことはできますし、むしろ、未熟な僧侶より熟練の一般スタッフの方が優秀です。でも、どうにもならない話しになつた時に最後まで付き合えるのは、たぶん、宗教者かなと思っています。みなさんはこの先、宗教

との付き合いなんてイメージできないと思いますけれども、それが宗教の一番のウリと言いますか、強みかなと思っっています。

阿弥陀さんの信仰なんか特にそうだと思います。阿弥陀さんは「どんな人も救い取る」という誓いを立てた方です。どんな人だって「阿弥陀さん」と名前を呼べば救われるんだと。その誓いが達成されない限り、私は仏さんにはならないぞと言っていた方が仏さんになられたということは、その願いは果たされた。すなわち、どんな人だって阿弥陀さんの名前を唱えれば救われるということです。なかなか都合の良いロジックだと言ったら怒られますか（笑い）。でも、すごいなと思うんですよ。そこに優しい存在がある、身を委ねられる確かな存在があることは非常に大きいんですね。だから、宗教を信じる人はそういう時に強いんです。どうしようもなくなつた時に強い。われわれは阿弥陀さんの宗派とはちよつと違うんですけど、そういう確かなものが自分の中にあると信じています。暖かいもの、確かなもの、優しいもの、それが自分の中にあると思えるから、最後の最後で頑張れる。私の中に、誰よりも優しくしてくれる何かがあると思えるから、人に対してそういうことをしたっていいじゃないかと思えるんです。自分に余裕がなければ、自分が優しくされてなければ、なかなか人に優しくできません。私自身が誰よりも仏に優しくされてい

る、だから当然、他の人にもちよつと還元しなさい、となるよね。それが宗教者のありようかなと思っっています。

みなさんにはそういう意味で、宗教に広く浅くでもいいので、たくさん触れてほしいなと思うんです。特にこういう宗門の大学に来たら触れる機会も多いと思うので、さつきも前に向かつて三帰依文ですか、みんな読んでますけれども、あれを例えば四年間いる間に、「訳のわからんこと毎回やってたな」っていうだけで終わっても、それはそれなんですけど、できたら、「ああ、こんなことを言ってたんだ」と分かるだけで、その先が変わることがあると私は思います。

そして、そういう思いで、若手の和尚がいろんなところに、いろんな形で出ていっています。これは二〇一八年の一月にやっていた行事です。大阪の万福寺でやったんですけど、これは宗教団体じゃなくてNPOです。ハローワークにちなんで、「ハローライフ」という名前のNPOがやっている就業支援活動です。その一端を僧侶に担ってほしいということで行ってきました。一般の、元気もあって、大学も行って、普通に「さあ、就職するぞ」という人のためというよりは、引きこもったり、いっぺん就職を頑張ってみただけ、挫折が続いて出られなくなったという人たちのために、違うことをやろうよと

始めた活動です。これに何やかんや僧侶は二〇人ぐらい関わってたのかな。

他にも二つ活動があります。一つは、六月一日から正式に始まるということで、この間、神戸新聞からも取材を受けました。ネットニュースでも見られると思います。「Hey Bouzi (ヘイ ボウズ)」という名前の、何かというと、みなさん一般の方と、われわれ僧侶のマッチングサイトです。核になる活動は「Bouzi 散歩」っていう、どっかで聞いたような、けしからん例え方なんですけど。いわゆるJK散歩ってありましたよね。ご存知？ あんまり知らない方がいいかもしれない。若い女の子にね、おっちゃんを渡して「ちよつとデートして」っていう、風俗の入口になるんじゃないか、けしからんじゃないか、っていうバイトがあるんだそうですが、それになぞらえてはいるけれども、そういういかかわしいことをしようっていうんじゃないかと、お寺に行ってお坊さんに会うとか、お坊さんに改まって話を聞くのは敷居が高いっていう人が、気楽にお坊さんに会ってみたいな、話を聞いてみたいな、ってなった時に、じゃあその機会を作りましょう、というマッチングサイトなんです。三、四、五月とプレオープンして、この六月から正式に始まります。今、一五、六人で、登録する和尚の数も増えてきているところですよ。「何を言うとするんや？」と興味を持たれたら後で検索してみてください。神戸新聞と「Hey Bouzi」で出て

くると思います。それが一つです。

もう一つは、お寺を開放する活動で、コンサートとかいろんなことをやっています。妙心寺の中には塔頭たつちゆうって言って、小さいお寺がいっぱい入っているんですけど、その中の三カ寺が共同で、ちょうど明日と明後日、「音庭」というタイトルでチェロとギターとピアノの三人が来て、音楽会をするんです。会場となるお寺によって組み合わせを変えたり、趣向を変えたりしています。同じ臨済宗、同じ本山の中にあっても、ちょっとずつ個性が違う、和尚が大事にしているものも違う、そういったものに触れてもらう中で、気軽にカジュアルな感じで、お寺とか宗教に触れてもらう機会を作りたいという思いで活動しています。ちょうど明日、明後日なのでむっちゃコマーションャルっぽくなってあれなんですけど、学割の設定はなかったんですけど、みなさんが来るなら、学生ですってわかれば学割がきくようにはしてきましたので、良かったら来て下さい。

これで最後にしますが、みなさんにお渡ししました『宗教者からのメッセージ』はコピーしたもので一部分しかありませんですけど、元々はこういう冊子です。たくさん宗教者がメッセージを寄せています。4には私も文章を寄せました。たくさんの方がたくさんの方の角度で言葉を紡いでいます。これが大事なんです。宗教者だからといって同じ様なことしか

言いませんじゃなくて、それぞれの信仰に従って、大事だと思うところを伝えていく。その中で、何か一つ、みなさんの心に引っかかるものがあればいいかなと思っています。冊子をお配りしたかったんですけど、手元に一〇〇冊くらいしかなくて、それくらいあったら間に合うかなと思ったら五〇〇人くらいいるって聞いたので、流石に無理だと思って断念しました。本願寺のホームページからPDFとかで引っ張れるようになっていきます。無料で配布している冊子で、ダウンロードも無料になっていきますので興味があったら読んでみてください。宗教者という枠組みになってるのでキリスト教の方もいるし、神道の方もいます。女性もいます。女性の神主さんとキリスト教の方かな？もいますので、ぜひ一度読んでいただきたいなと思います。

この本は『ことばの向こうがわ』で、安部智海くんが書いている本です。彼は浄土真宗本願寺派（西本願寺）の研究員で、職員として仙台にいて、多年に渡って仮設住宅の訪問活動をしていた人です。彼が報告としてまとめていたものを、自分の思いも加えて本にしてくれました。私は今回の話をする時にこれを参考に使っています。題材は私自身にあるんですけど、ちゃんとまとめてなかったもんやから、どんなことがあったっけなと思いきっかけにちょうど良かったんです。これはなかなか良い本です。人にはいろんな思いが

あつて、それが簡単には片づかないということをちゃんと正面から捉えている。「これはこういうもんだよ」って乱暴にひととめに片づけようとしてない。そういう良さです。安部くんは面白い兄ちゃんですけど、そういうところはきちんと書いていますので、良かったら一度読んでみてください。自死・自殺に関しては、先の『宗教者からのメッセージ』にいつペン目を通してもらえたらなと思います。

後もう一つ、何年か前ですけど、NHKで『ラジオ』っていうテレビドラマがあつたんですよ。被災地の女川辺りが舞台になつているんですけど、出演者の一人が問題を起こして、今見るのは難しいかもしれません。見られたら見てください。これも現地での複雑な思いをそのまま大事に切り取つてるなという、良いものでありました。

ちよつと時間押ししちゃいました。駆け足でお話しましたので、あまりまとまつてない感じもありますけど、みなさんこれから四年間大学生活を送る中で、困る時とか、苦しい時があるんじゃないかなと思います。自分がそうじゃなくても、周りにそういう人がいるかもしれません。そんな時に人はどんなふうに関わるのか、考えるきっかけになつていたらいいなと思います。今日はどうもありがとうございました。